

東勇作メモリアル (5)

— バレエを描いた絵皿 —

展示期間 /

2016年3月12日(土)~2016年4月15日(金)

企画・構成 /

関典子 (薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター)

東勇作メモリアル

「薄井憲二バレエ・コレクション」の中から、薄井氏の師にあたる東勇作(1910~1971)のシリーズをお届けします。2014年10月19日、『牧神の午後』を踊る東勇作の銅像(村田勝四郎作)が、仙台市青葉区の西公園に設置されました。これは、「私たちの師匠だった東は長い間存在を忘れられていたが、故郷の仙台に銅像を移すことで、功績を後世に伝えたい」との思いから実現されたものです。

本展では、『薔薇の精』や『第七交響曲』を描いた東自作の絵皿を中心に、東が敬愛し、自室にも飾っていたのと同様のセルジュ・リファールの写真などを展示いたします。日本バレエの黎明期を支えた東勇作氏、そして、薄井憲二氏のバレエに対する想いや煌めきを、ご堪能ください。

東勇作とは — 薄井憲二

東勇作は、バレエ舞踊家を目指して仙台から上京した。バレエ芸術の殆ど存在しない当時の日本にあって、伝手を求めて習練に励み、英仏語による資料に学び、自らのバレエを確立し1941年バレエ団を設立した。西欧の作品を自分流の解釈で上演し成功したが、東の真骨頂は、習得したバレエの土台に、自らの舞踊性をのせた、自分のための独舞であった。その芸術性、独創性、高度な技術は、東自身以外誰れにも伝え得ず、残念ながら消滅した。

東勇作『第七交響楽』 — 薄井憲二

(1943年歌舞伎座公演で上演した)『第七交響楽』はベートーヴェンの『交響曲第七番』によるもので、その頃、新しいジャンルとして注目されていたレオニード・マシーン(1895~1979)のシンフォニック・バレエの第四作を模した。これは1938年の初演で、のちに一世を風靡するバランシン(1904~1983)の交響曲バレエはまだ生まれていなかった。東はイーゴリ・ユスケヴィッチのマーキュリー、アリシア・マルコワのジュノーの踊る第三楽章、生

命が誕生して若い牡鹿ユーラ(のちのジュルジュ・)スキビーンが飛び跳ねるさまなどに強く惹かれて、この作品に取り組むこととなった。創造の神が光をもたらし、自然と人類が生まれ、一方では天上の世界もあり俗世界で起きる最初の罪業も描かれ、遂に世界は劫火に焼かれてしまうという難しい作品だった。(中略)この公演には大きな反響があり、激しくなっていく日米戦争にも拘わらず、バレエ団には明るい未来が開けてくるような気がしたが、そうはうまくいかない。翌1944年、東勇作は一水兵として横須賀海兵団に入隊させられてしまうのである。こうして第二次世界大戦前の東勇作の活動は終りを告げる。

東勇作『薔薇の精』 — 薄井憲二

東勇作はまた『薔薇の精』が好評だった。跳躍力があつたから圧倒的な効果を挙げた。踊りは勿論創作だが、原作と違うところが二ヶ所あつた。ひとつは少女(松山樹子)が椅子から起き上がると、最後の眼醒めの直前にもう一度座るまで、ずっと椅子には戻らないことである。パリ・オペラ座とバレエ・リュス・ド・モンテカルロで何度もこれを見ていた蘆原英了は、少女は踊りの途中でもう一度椅子に戻ることを東に教えた。しかし東は、音楽の流れの中で、どこにもう一度座るところがくるのか考えられないといつてその助言は無視した。

もうひとつは、“薔薇の精”が上手の窓から入ってきて、また同じ窓から出ていってしまうことである。原作は中央より少し下手寄りの大きなフランス窓から出ていくのである。フランス窓というのは、殆ど床まで届く、両開きの窓をいう。このバレエは、ニジンスキーの驚異的な跳躍、殊に最後のひっこみが眼目だったから、フランス窓にして跳び込み易くしたのだろう。記録や解説では“薔薇の精”は窓から跳び込んで来て、窓から跳び去って行くところから、東が窓をひとつにしたのは当然だろう。

(薄井憲二著『生誕100周年 記念誌 牧神~或いは東勇作~』2010年)

主な出展リスト

- ◆ 東勇作『薔薇の精』『第七交響曲』絵皿(日本 1950年代)
- ◆ セルジュ・リファール 署名入り 写真(フランス 1930年代)
- ◆ 参考映像『東勇作と牧神の午後』(仙台・こどりTV 2015年)



兵庫県立芸術文化センター

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町 2-22

tel: 0798-68-0223 fax: 0798-68-0212

※ 禁無断転載・複製・引用